

柴田（しばた）夫妻コレクション

柴田夫妻コレクションは、有田焼 10,000 点以上を集めたものである。1990 年より 14 年間にわたって、柴田明彦（しばたあきひこ）（1940～2004）・祐子（ゆうこ）（1944 生まれ）夫妻から当館に寄贈された。作品の大半が国内市場向けに作られたものであるため、蒲原コレクションとはデザインや用途が異なる。展示は 1610 年代から年代順に並べられており、江戸時代（1603～1867）の様々な時期の作品のセレクションが、有田焼の時代を超えた変化を物語っている。

初期の有田焼は、灰色がかった白色の素地が特徴であった。時と共に生産工程の質と正確さが向上したため、職人たちは、さらに白く薄い磁器を作れるようになった。1630 年代より、デザインは中国の影響をますます受け始め、サギや鶴、野ウサギなどの縁起物や、龍や鳳凰などの架空の生き物、特定の種類の花などが描かれるようになった。17 世紀後半になると、デザインや技術が大きく改良され、有田焼の評判は高まった。柿右衛門（かきえもん）様式や金襴手（きんらんで）様式の作品は初期の作品との違いが際立つようになり、有田焼の発展の過程を見て取ることができる。

また、この展示では、江戸時代に有田焼がどのように用いられていたのかも紹介しており、コレクションから選ばれた磁器が、当時用いられていたと考えられる様々な食膳の形で展示されている。

計 10,311 点の中から約 1,000 点が展示されており、年に 1 回入れ替えが行われている。コレクションは登録有形文化財となっている。